第3回金沢大学子どものこころサミットを終えて

東　田　陽　博

平成26年11月27日(木)～29日(土)、北國新聞赤羽ホール（1階 北國新聞交流ホール）において、約2年半ぶりとなります第3回金沢大学子どものこころサミットが開かれました。

3日間の参加者は210名にのぼり、30題の講演が行われ活発な質疑応答が交わされるサミットとなりました。

第1日目は、子どものこころの発達研究センター相互認識基礎部門のテーマであるCD38とNAD分子の生理・精神作用について、国内の研究者に加え、多くの海外の研究者を招いた英語による講演が行われました。それぞれの専門的立場から講演していただき、CD38等NAD代謝の医学生物学的意義について、自閉症を含めた広い分野での役割を理解する有意義な相互理解が得られました。

第2日目は、午前の部で金沢大学子どものこころの発達研究センターの研究者による最近の研究報告、午後の部では自閉症スペクトラムを対象としたオキシトシン臨床試験に関わる研究者を交えて、その臨床試験の現状や様々な立場からのオキシトシンの働きや、自閉症へのアプローチについての講演がなされました。オキシトシンの作用に関心を持つ市民にも理解しやすい切り口の演題が多く、一般の聴講者が最も多く来られました。自閉症スペクトラム、社会性の障害が身近なものとして関心を持たれ、情報を求める人が多くなっていると感じられました。

第3日目の午前の講演では、精神疾患のゲノム・遺伝子解析とその医療倫理をテーマに、様々な疾病の遺伝子ゲノム解析が進む中で、精神疾患と遺伝子との関連、その頻度や、最終的に疾患に特異的な行動という症状への影響、更にインフォームド・コンセントのあり方まで、研究者としての倫理に関わる取り組みについての講演がなされました。実際に患者に接する臨床現場にいる研究者にとっても、改めて研究倫理について確認する事の出来る良い機会を得られたと思います。午後は、江頭基様（文部科学省）のCOIプログラムについての特別講演の後、脳磁計(MEG)を用いた自閉症スペクトラム幼児の画像診断をはじめとして、脳や体の状態をモニタリングし、診断や研究に役立てるセンサーを用いている研究者の講演が行われました。言語能力、コミュニケーション能力、情動など、従来は客観的な数値として測定する事が困難であったものについて、測定結果とその解析及び今後の展望などが講演されました。

最後になりますが、十全医学会をはじめ、北國新聞社及び金沢コンベンションビューローのサポートにより活気あるサミットを開催する事ができました。この場を借りてお礼申し上げます。

平成26年11月吉日